天国のつくり方

第一部　実存の哲学

二・情緒の章

《価値決定の要》

— ２０１３年４月　先行配布版 —

知性の章をアップしてから一月半かかってしまいました。中々進まないものです。知性の章では何を言いたいのか分からないというご批判をいただきました。ごもっともです。情緒の章は知性の章と対をなしますので分かりにくいかもしれませんが、前章に目を通してからこちらをご覧いただければ幸いです。前章を保管する内容も含まれます。

これをご覧になってのご関心、ご感想、ご意見等持たれた方は下記宛にお便りいただければ幸いです。

heaven1-pre@o-baka.com

桜葉　佳代

二　情緒の章《価値決定の要》

１・情緒の位置と対象（想蘊というフィールド・五蘊と性形二元論的観点）

宗教と科学はなかなか相容れないものです。そのことを個人の内面性から考察すると、心の中で「知性」が「情緒」とぶつかりやすい存在だと見ることができます。６ページの図で科学的領域と宗教的領域をくくって見ましたが、これは便宜的であり厳密ではありません。例えば、情緒について科学の領域外にしてありますが、情緒についても心理学と称して科学的解釈を試みています。また、生命については医学をもって制している様ですがその本質には到達できていません。一方宗教にも、肉体の不具合を癒してゆく活動をするものがあります。また、宗教的な内容を理性的な観点で教学として整理することは多くの団体が試みています。私が今ここに書こうとしていることも情緒世界を理性的に表現する試みです。

情緒というのはとても捉えにくいもので思考の対象にはなじみにくいものです。釈尊（お釈迦様）が“こんにゃく問答”で説かれたように「〇〇〇ではない」「■■■ではない」と削ぎ落とすことで初めて取出す事ができるような存在です。常識人であれば情緒世界を押し殺してでも理性的であろうとします。一方でそんな姿を偽善的であると批判する向きもあります。実際に、理性一辺倒で生きてゆくと大きなストレスを抱えることにもなります。だからと言って、情緒的面を前面に出して生活することは必ずしも良い結果をもたらしません。理性的な人と情緒的な人とどちらがより信頼され、世の中に受け入れられやすいかといえば、やはり理性的な人の方が信頼され、受け入れられるのです。

情緒とは、私が幸不幸を感じるところです。情緒は情緒と呼ばれるよりも感情と呼ばれることが多いかもしれません。情緒・感情という存在が支離滅裂で信頼の置けないものであれば、私の幸福は他者の不幸に直結するものになります。私の幸福を求めれば万民の幸福など願う術もありません。つまり天国はありえないという結論に至ってしまいます。

私たちは幸福について考えるときに情緒世界についてよく知らなければならないのです。

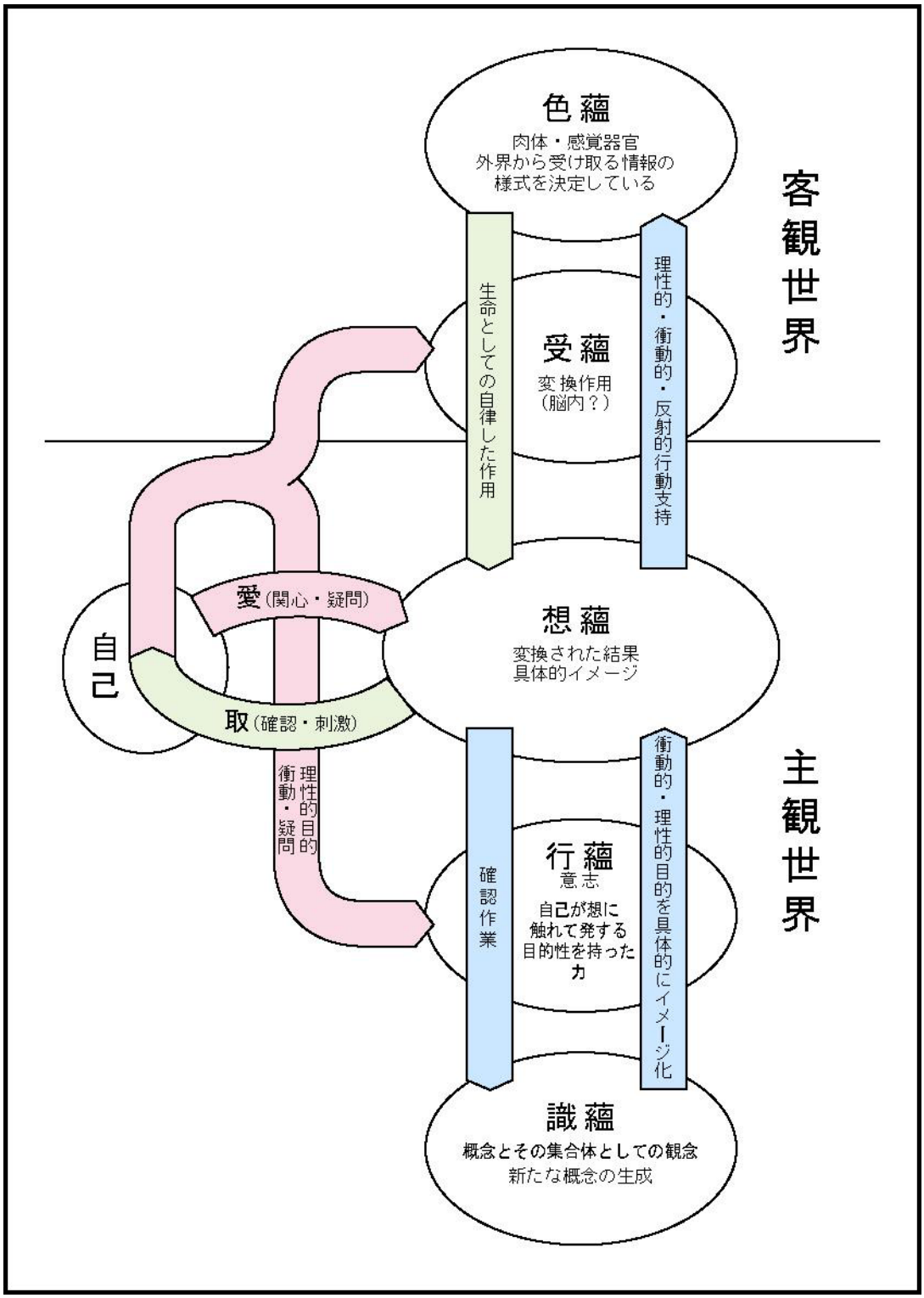
先に五蘊という考え方を紹介しました。五蘊は客観世界を認識し概念化するプロセスであると言えます。概念化するプロセスとは思考活動に他なりません。この五蘊について仏教では「五蘊非我」「五蘊皆空」「五蘊無我」などと

言います。主観世界で感じて認識することは真の意味での私ではないとします。また、五蘊は空しいものなのでこれに執着することが不幸に繋がるとも言うのです。思考することが我の実体であるとしたデカルトと真っ向から対立します。しかし、デカルトは気が付いていなかったのですが疑い続ける自分以前に真実な存在を求めて疑うことを始めた自分がいたはずなのです。

仏教発祥当時のインドでは、五蘊ではない私のことをアートマンあるいは真如と呼びます。すべてのことを感覚し、体験する本体であり、従って感覚されることも体験されることもないとされます。また、当時信じられていた輪廻転生説で転生する本体がこれだと考えられているものです。釈尊は経験論者であったため、経験できないものについては語られなかったという説があります。自分自身の姿は鏡を通さなければ見ることができない様に、経験する本体であるアートマンはそれ自体を体験することができません。つまりアートマンについては何も語っていません。ウィトゲンシュタインが「語りえぬものについては沈黙しなければならない」と言ったことを思い出します。この経験できない、語りえぬ存在、真如とかアートマンとか呼ばれるものが理性世界を遊び一喜一憂しています。この主体的存在、仏教的には真如・アートマンと呼ばれるものを何と呼ぶのがふさわしいのか非常に難しいところです。最近の精神世界について書かれる表現で多く見られる『自己』とするのが妥当でしょうか。この『自己』こそが幸福を感ずる主体的存在と言えます。『自己』の内に情緒的活動があるということです。

『自己』が情緒であるという表現に違和感を覚える方も多いと思います。これは哲学の起こったギリシャの時代から『理性』こそが人間の人間たる本質であるという考えが定着していることを示し、人間の情緒性がいかに幼い段階に留まっているかということを示しています。そもそも思想哲学の分野においては知性的に優れた人物が担当し、情緒的な人物が学術的に語ることなどはありませんから無理からぬことなのです。哲学（ hilosophipa ・フィロソフィア）という言葉は知を愛するという意味合いになるそうですが、知は愛される対象であり、愛する主体は知とは別な存在であることになります。

さて、先ほど五蘊についてこれを思考活動であるとしましたが、これは少々乱暴な表現ですのでここで少し分析してみましょう。
五蘊について図解したものを掲載します。



※　受、取については、釈尊の初転法輪の十二因縁より。

（無明に縁って行が生じ、行に縁って識が生じ、識に縁って名色が生じ、名色に縁って六入が生じ、六入に縁って触が生じ、触に縁って受が生じ、

受に縁って愛が生じ、愛に縁って取が生じ、取に縁って有が生じ、有に縁って生が生じ、生に縁って老死が生じ、老死に縁って怒りと悲しみと苦と憂慮と悩みとが生ず。）

そもそも「色蘊」は肉体を表すのでこれは思考活動そのものではありません。同時に、「受蘊」は感覚作用であり、肉体の生命力によって自律的に主観世界に情報を変換する作用です。これは脳内の出来事であるかもしれません。この色蘊、受蘊については、前章 3 で書いたとおりです。「想蘊」に至り初めてこれが主観世界・精神世界の出来事ということになります。五蘊には表現されていませんが、「想蘊」に先ず対峙するのは『自己』であると言えます。この想蘊は、前章で書いた様に、自己（魂）のコックピットです。様々な印象を味わうことが出来、同時に好き嫌いの評価を持ちます。次いで『自己』は「識蘊」に働きかけてこの印象が何者であるかを確認します。初めて味わうものであるのか、過去の経験に経験したものであるのか、危険性は無いのかなどと共にそのものの名前を確認します。過去に対応するものが無ければ、この印象を受けた状況と『自己』が下した好き嫌いの評価とともに新たな「識蘊」を生成します。「色蘊」すなわち観念世界です。これが「行蘊」の作用といえるでしょう。ですから、厳密に言えば『思考活動』は「行蘊」と「識蘊」に限定されます。想蘊についての精神世界の場そのものであり、ステージのようなものです。五蘊が表すところは「識蘊」が生成される過程の生命の自律作用と『自己』による介入作用なのです。お釈迦様が五蘊非我と言われたことからすると、精神の内容をこの様に分析し、知性的部分を取り去って残っている部分が自己・アートマンであるということになります。

このように『思考』は『自己』によって愛される対象であり、生成過程においては、『自己』存在なくしてはありえないものなのです。『自己』は『思考活動』を行うに当たっては、一定の美学とも言えるルールを持っています。その一つが整合性です。人は生まれてから死ぬまでに多くの経験を持ってその都度名前を持った「概念」を生成し、拡大させます。語彙の数だけ概念が存在するのですが、この概念同士に矛盾が生じることを嫌います。概念同士を組み上げて主観の内部に「観念世界」を作り上げてゆく思考活動を行いますが、概念同士に矛盾があるとこの観念世界を大きく組み立ててゆくことが出来ないため、この矛盾を嫌うのです。そして成長することを求めます。『自己』はこの観念世界の中を遊びますし、 philosophia ＝愛するのです。喜びを多く持つためには対象である世界の拡大を望みます。また、客観世界を忠実に写し取ろうとします。これは後で書きますが、『自己』が他者との共感性を得るところに

喜びを見出そうとする性質を持っている故と考えます。これらのルールのために、論理性と数理性の機能が発揮され観念世界を形成してゆきます。この機能が自己内部の『理性』と呼ばれるものです。実は理性には価値判断の機能はありません。価値は『自己』が美しいと感じ喜ぶところに決定しています。そして『思考活動』にとっては整合性と拡大のルールに沿うことが『自己』の喜ぶ美としての価値になるのです。『自己』内で喜びを感じる性質が『情緒』です。

これは『自己』が身体に向き合うときにも同じことが言えます。生命活動を通し、喜びを得ようとするので肉体維持、成長に必要とするものを得ることは情緒的に喜びと感じられます。肉体の成長によって運動機能、感覚機能が向上すれば多くの「想蘊」・印象を得ることが出来るのでその分多くの喜びの機会を得ることが出来ます。身体は成長し、鍛錬することが『自己』に帰する美であり価値となります。

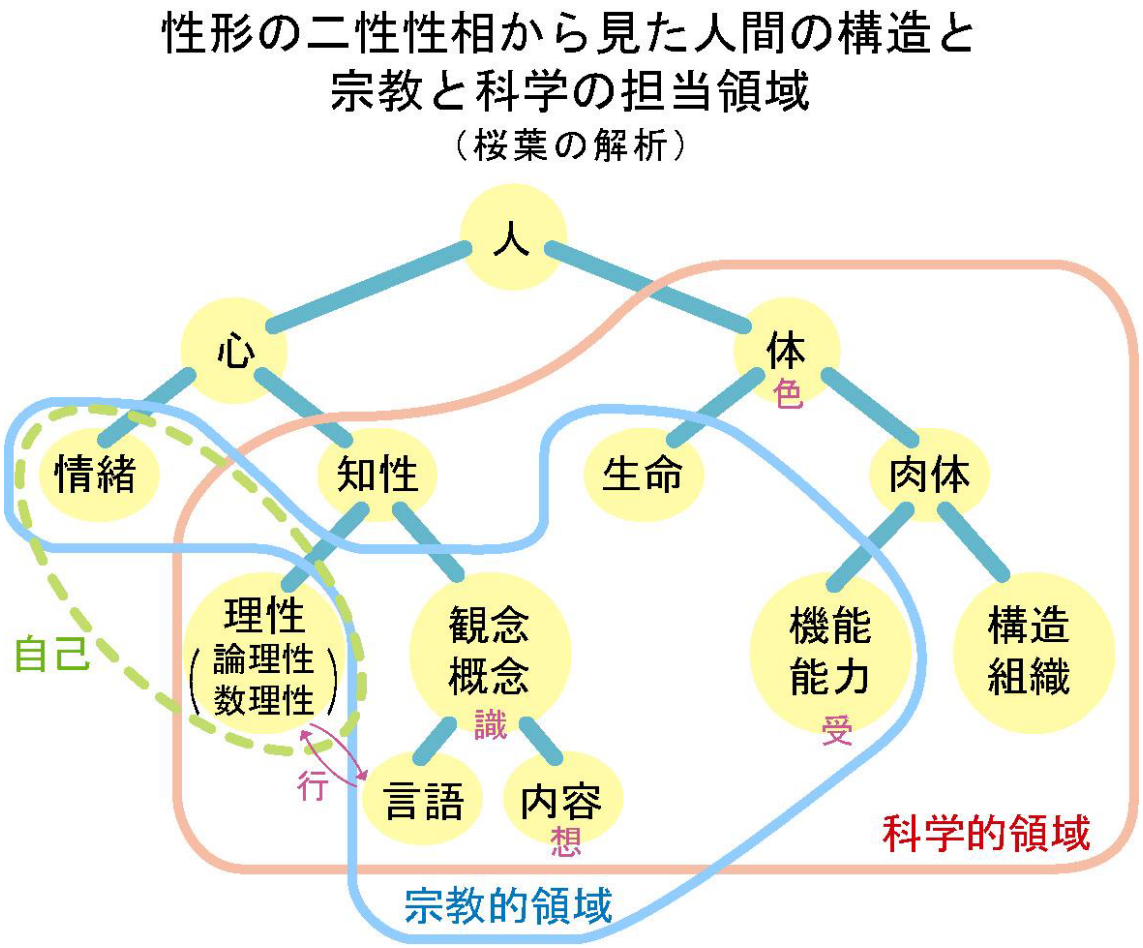
もう一方で『自己』は客観世界に働きかけることをします。観念世界から出ることの出来ない『自己』は客観世界に属する肉体を通して客観世界にアプローチします。この流れは五蘊を逆に辿ることになります。『自己』が「識蘊」（観念および概念の中）で喜びを充足できなかった場合、「想蘊」に新たな刺激が現れることを求めます。それを得るためにどうしたら良いかを「識蘊」の情報と照らし自らの行動をイメージします（「行蘊」）。そのイメージ（「想蘊」）を「受蘊」を通じ（この場合は「発」と呼びかえることが適当かもしれません。）「色蘊」の行動として表します。また、印象を受けた『自己』が理性的概念の確認を待たずに衝動的に行動イメージを作り肉体を動かすことを衝動的行動と呼ぶことが出来、イメージさえも作らず肉体が生命の自律性に則って行動することを反射的行動と呼べます。反射的行動や衝動的行動は『理性』を介さない行動であるため観念世界に求める整合性にあわないことがあります。

このように、五蘊の中で自己は行動をしています。五蘊の中で自発的な力を有するのは色蘊の生命力としての自律的な力と、自己が発する求める力です。力というものは方向性を持っています。学校の物理の時間には、ベクトルとして習いました。多方向に無秩序に見えるものでも拡散というベクトルを持っています。生命の力は生存、感覚、運動、繁殖などの目的というベクトルを持ちます。このことによって肉体と観念世界の成長を図ります。肉体は大きくなり、感覚の精度を上げ、運動能力の向上により行動の幅が広がります。それは経験の機会を増し自身の観念世界の拡大と充実に繋がります。このことは自己にとってもダイレクトに喜びに繋がるものです。肉体と観念の成長は自己の目的の一部であり、達成すれば喜びを覚えます。

観点を変えて、デカルト的二元論から展開して図にしてみました。
心と体は明らかに精神と形ですから明確です。ここで心の内部に二つの区分を設けます。前に書いた思考活動即ち“知性”ともう一方の感情即ち“情緒”です。情緒世界が喜怒哀楽を有するものであれば、幸福が表れるのはこの情緒の世界ということになります。

しかし、心を情緒と知性に分けてみてもどちらも形を持ちません。これはどちらがより形を持ちやすいかと考えての分類です。デカルトらの言うように、主観は客観と一致できないとしながらも、知性は客観世界を映じ、一致しようとします。しかし、情緒世界は客観どころか知性さえも超越してしまいます。とすれば、知性の方が情緒よりも形になりやすいものであると言えます。

小さく赤で書いてある文字は「五蘊」の色受想行識です。このように分類してみると先に書いた『自己』は五蘊に含まれない部分ということで「情緒」と知性の部分である「理性」であると見ることが出来ます。その中でも「情緒」が主導的働きをすることは 2-2 で考えて見ましょう。



図中の体の方から見てみましょう。生命は無形のように思えますが、心か体かと言えばここでは体に属するものだとします。肉体における生命活動を表す言葉だからです。そして生命を除いた肉体の部分ですが、これも具体的な物質で構成される組織や構造を持っていると同時に発揮される様々な能力・機能は物質としては存在しません。

一方、心・精神の部分は全てが延長を持たない無形な存在です。そんな中でも知性は図示したり文章に書いたりして形になりやすいのですが、情緒と言うのはいかにも捉えにくいものになります。形状化するために絵画や彫刻を用いたりもしますが日常的ではありません。しかも、形状化された瞬間からその作品は名付けられて概念として観念世界に収納され情緒そのものではなくなります。実際に私たちは多くの芸術作品を知識として知っています。ただ、その知識の中には好き嫌いや様々な感想が情緒によって付与されています。

知性の中でも、観念とか、概念は具体的なものを指し示しますが、理性はその概念や観念を取り扱う作用性を持ちます。観念・概念の方がより形状的と言えます。そして、観念・概念は言語によって支えられています。五感などによって獲得されたイメージの全て（視・聴・味・触・嗅・寒暖・痛・平衡など）の内容（言語学者ソシュールが言うところの「シニフィエ」）が具体的な言葉自体（音声・文字などの記号表現。同「シニフィアン」）というタグによって呼び出されるようになっています。言葉は肉体（色蘊）の五感から受け取った（受蘊）印象（想蘊）を区分（行蘊）してその情報を格納（識蘊）する上では記憶を呼び出すためのタグであり、収納整理箱です。

これはどういうことか？言葉は知性の枠組みを作り上げているということです。言語は心を支える肉体のような役割を果たしていますから情緒に対しても影響を与えないはずがありません。多くの宗教団体において、言葉を重要視するのは言葉によって人格が影響されることを直感的に知っているからなのでしょう。

このように情緒と知性は相互的に影響を与えるものでありながら、情緒は知性を含む五蘊全てに喜怒哀楽を感じる主体的存在と言えるのです。

２・快と不快（快によるエネルギー）

情緒的機能の基本は「快」・「不快」の二つだけです。快をもたらすものは好きになってそれを求め、不快をもたらすものを嫌いになってそれを遠ざけようとします。そして知性的機能をもって好きなものと嫌いなものを区別して記憶し、それぞれに名前を知り、複雑な関係性を理解します。知性的情報には情緒的評価が付いていて、比較して選択する際には重要な働きをもちます。情緒の機能無しには知性の判断は「大」・「小」などの数値的なこと、あるいは「異」・「同」の差異的なことに限定されます。「美」・「愛」・「正義」・「道徳」の判断材料は知性的機能には含まれていないのです。情緒的に好むか好まないか、快か不快かが、状況に応じて違った呼ばれ方をしているに過ぎません。

一般的に美しいとか、一般道徳とか表現されるケースは、複数人数の快・不快の情緒が合意した過去の価値判断を情報として概念化しているものですから、万民に共通するものとは限らないのです。ですから多人数で価値判断を協議する場合には絶対的な答えを出すことができません。

ウィトゲンシュタインによれば「殺人を犯してはいけないのは、それが私の美意識に反するからだ」ということになるそうです。一見訳の分からない言い分であり、いい加減な印象を受けます。しかし、これは善悪の判断は美醜の判断と同様に、情緒的なものであることを示します。そして彼にとっての言語は知性的役割のみを負うものであることから、情緒的領域にあたる価値判断は論じ合うべき問題ではないということなのです。

また、情緒はエネルギーを創り出す、いわば発電所のような機能を持っています。いわゆる「元気」の出所です。「好きなもの」を手に入れれば誰だってうれしい。「好きな人」のためなら頑張れる。知性的にも、わからないことを調べたい気持ち、「知的好奇心」はエネルギーと考えられますが、分からない事の不快感、分かった時の快感は、いわば「快」・「不快」をともなう情緒的機能なのです。

さて、「元気」ひいては「やる気」は『意欲』に直結します。『意欲』は情緒的力と、理性的情報の複合でそのベクトルを定めることができます。生理的欲求や反射にも対応します。心の構造を『知』『情』『意』に分類することがありますが、この『意』については他の二つの付随的機能に感じられます。意欲という行動的・積極性のある機能のようですが、それ自体は一方向に向かう力でしかなく、判断力という主体性ではありません。肉体的な生命による本能

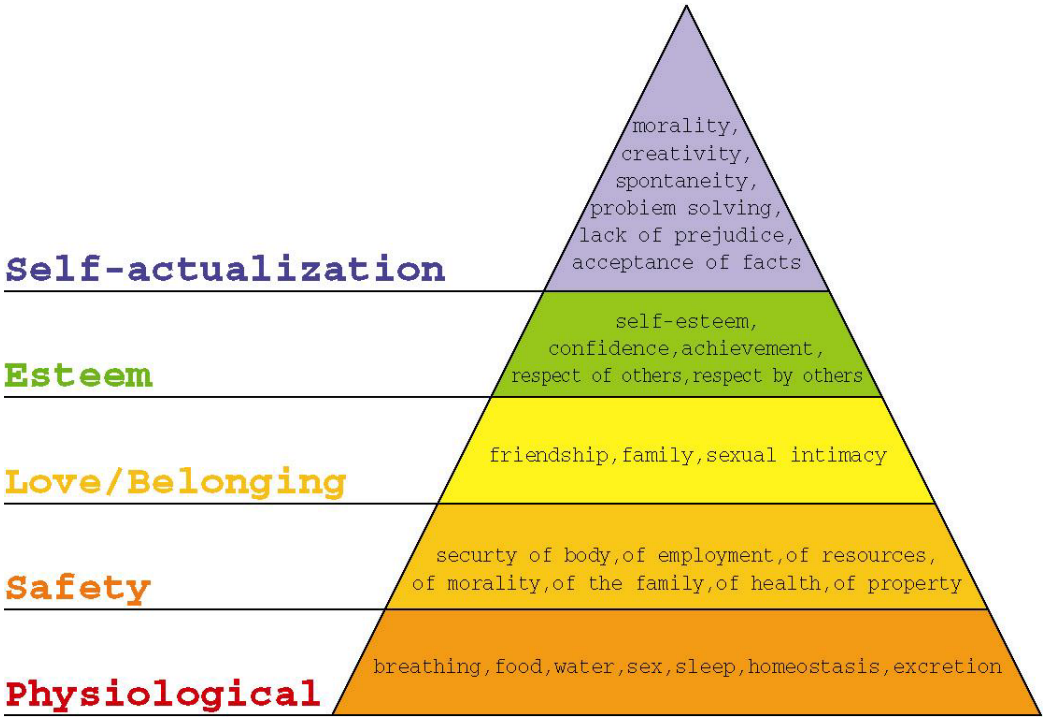
的な意欲さえも、肉体的感覚から来る「快」・「不快」に分類され、快の方向へ向かう力でしかありません。
　つまり一般に言われる『意』とは、「快」によって生み出されるエネルギー、ベクトルそのものと考えられるのです。

　人は本来「快」に向かうことしか出来ません。それ以外にはエネルギーが供給されないからです。
　しかし、このエネルギッシュな情緒的判断を停止して、理性的判断のみで行動することを求められることが多い昨今です。そして実際に情緒的には不快であったとしてもそのように行動しています。エネルギー無しでどう行動するのでしょうか？理性に於いては情報の整合性と拡大が前提となり、そうでない状態は「はっきり言って困る」わけです。理性的に困る状況は、情緒的には「不快」ですので、その「不快」を解消することによって消極的ですが、「快」を得ます。消極的であろうとも「快」のエネルギーですから、動くことができます。そして理性的不整合による不快に向かって進むことも出来ないのです。この様な、情緒的判断を押し殺す行動がいわゆるストレスとなって人の心を蝕んでいます。また、最近では経済の問題でも景気は人の気分であると言われます。この気分という言葉も、情緒を表すことばの一つです。

　　「快」というものは、一方的に与えられることに対して感じることもあります。しかし、多くの場合人は「快」を自ら求めます。「意欲」です。「快」を求めることは、欲求を持つということです。欲求とは何処から来るものなのか、果てることなく沸いてくるものなのかと、今までにも人は様々に考えてきました。欲求について分析した例を紹介します。

　　心理学者アブラハム・マズロー（アメリカ 1908 ～ 1970 ）が「自己実現理論」という分析をしています。この理論は賛否両論あるようですが、考え方として参考になります。
　　人間の欲求（要求）を優先度によって５段階に分類し、下層の欲求を満たした上に、次の階層の欲求に向かうとしました。欲望の達成とは、すなわち「快」に向かうことです。

マズローの欲求段階説（ wikipedia より）



低次より

1. 生理的欲求（physiological neend）

　生命維持のための食欲・性欲・睡眠欲等の本能的・根源的な欲求。この欲求が満たされない場合、人間は生きていくことができなくなる。

2. 安全の欲求（safety need）

　安全性・経済的安定性・良い健康状態・良い暮らしの水準など、予測可能で、秩序だった状態を得ようとする。病気や不慮の事故に対するセーフティ・ネットなども、これを満たす要因に含まれる。この欲求を満たすために一生涯を費やす人が、世界にはたくさんいる。

3. 所属と愛の欲求（social need/love and belonging）

　情緒的な人間関係・他者に受け入れられている、どこかに所属しているという感覚。この欲求が満たされない時、人は孤独感や社会的不安感を感じやすくなり、鬱状態になりやすくなる。この欲求が十分に満たされている場合、生理的欲求や安全の欲求を克服することがある。

4. 承認の欲求（esteem）

　自分が集団から価値ある存在と認められ、尊重されることを求める欲求。尊重のレベルには二つある。低いレベルの尊重欲求は、他者からの尊

敬、地位への渇望、名声、利権、注目などを得ることによって満たすことができる。マズローはこの低い尊重のレベルにとどまり続けることは危険だとしている。高いレベルの尊敬欲求は、自己尊重感、技術や能力の習得、自己信頼感、自立性などを得ることで満たされ、他人からの評価よりも、自分自身の評価が重視される。

5. 自己実現の欲求（self actualization）

自分の持つ能力や可能性を最大限発揮し、具現化したいと思う欲求。すべての行動の動機が、この欲求に帰結されるようになる。

マズローは晩年、「自己実現の欲求」のさらに高次に「自己超越の欲求」があるとした。自己超越者（transcenders）の特徴は

1.「在ること」（Being）の世界について、よく知っている。
2.「在ること」（Being）の世界について、よく知っている。
3.統合された意識を持つ。
4.落ち着いていて、瞑想的な認知をする。
5.深い洞察を得た経験が、今までにある。
6.他者の不幸に罪悪感を抱く。
7.創造的である。
8.謙虚である。
9.聡明である。
10. 多視点的な思考ができる。
11. 外見は普通である（very normal on the outside）。

以上がマズローによる分析です。

生理的欲求は肉体の維持・成長をするための欲求で、生命活動に関わります。いわゆる「本能」と呼ばれるものと考えて良いでしょう。

人の感覚は身体的な安全・成長・活動に都合の良いものを快い情報と感じるように想蘊に送って来ます。食べ物にしても、原初的には毒になるもの、食べることが出来ないものを「不味い」と感覚するようになっています。美味しいものを食べたとき、体に力がみなぎる力と共に、活動への意欲も沸き立つ経験は誰しも経験があるでしょう。着る物や住まうところも肉体を維持するのに都合の良い状況を心地よく感覚し、適さない状況を不快に感じるものです。多くの現代人は通常快適な環境にあるので良い環境といってもピンときませんが、逆に猛暑や極寒の中では何もやる気が起こらないという経験の方が分かり

やすいですね。性欲を満たす喜びも種を維持してゆくために必用なものです。色蘊から送られる情報を「快」に保てば肉体的健康は維持されるようになっています。ひっくり返せば肉体の維持、成長、活動（健康）は情緒にとっても喜びです。このことは、ややこしい説明をするよりは、単純に日常的な実感を思い起こしていただく方が理解できると思います。天与の生命力から発動されるので意識的にコントロールされないことも多いですが、結果として情緒的喜びに結びつくものとなります。

安全の欲求は第１段階の欲求を安定的、発展的に行うための欲求です。ここには生命力から発動する力だけではなく、識蘊に蓄えられた情報も関わってきます。

想蘊に表れる内容は色蘊から送られるものだけではありません。識蘊からの情報も多く送られてきます。識蘊には過去の経験の記憶が蓄積されています。この記憶には当時の快・不快の感覚も収納されていますので、快い記憶と不快な記憶の両方があります。不快な状況に合っても、その先に快い経験が待っている経験が過去にあればそれを思ってやる気が起こり、困難を越える力がわいてきます。逆に現状が快適であってもそのままでは先々に強烈な不快感を味わう事態が起こる事を経験していれば、そこに向かうことを避けたく感じて不快感を持つようになり、回避行動をとろうとします。

このような予想をして行動の原動力とすることが出来るのは、情緒的な力に理性的判断の協力があってのことです。どちらか一方では成立しません。情緒だけでは予測が出来ませんし、理性だけでは欲求が生まれないため力が起こりません。

想蘊に情報を送ってくる理性は正確で有用な情報を持つことがその役割となっています。理性の情報源は識蘊にありますので、識蘊の情報が正確であり、豊富であることが必要になります。新しい事を正確に知りたいという欲求はここから表れるものです。多くの情報を得ても情報相互に整合性が無ければ役に立ちません。色蘊（肉体）の維持、成長、活動（健康）が情緒にとって喜びであるように、識蘊（概念・観念）の情報が正確で豊富なことも情緒的喜びになります。

所属と愛の欲求は前２段階を満たしてくれるコミュニティーを貴重に感じる純粋に情緒的「快」を求める欲求と言えるでしょう。

４段階目の承認の欲求について、彼は更に２段階に分けていることに注目します。低いレベルの尊重欲求は、理性低レベルの判断と言えます。知性の章で言語の特性として紹介した「区別」による判断にすぎません。しかも、自分自身での区別ではなく、他者から区別を受けることを求めます。高いレベルで

の尊重欲求を満たす自分自身の評価、即ち「自己」評価を高めることが大切なのです。

頂点にある自己実現の欲求ですが、これも知性的拡大の欲求に留まるもので、５段階の階層は知性的・合理主義の域を出ず、精神世界を含めての考察には至っていません。晩年に発表された自己超越の段階に至り釈尊の説いた「悟」の境地に触れ「五蘊」から抜け出す入り口に立ちます。

マズローの理論を展開するかのように、ディーパック・チョプラが『内なる神とつながる方法』の中で７段階の考察をしています。彼の表現は「脳の反応」「神」という言葉を用いていますが、「脳の反応」は肉体から知性までを含めた環境に対する反応、つまり置かれた環境の中で必要を埋めるための欲求（情緒が快を求める反応）を表し、「神」は必要を満たしてくれる（であろう）存在と、読むことができます。

彼は７つの段階として次の様に分類しています。

１．　守り神―――戦うか逃げるかの反応（Fight or Fight Response）

これは私たちが危機に直面した祭に、生き残るための反応です。この反応は、私たちを助けようとする神とつながっています。この神に助けを求めるのは、生き残る必要があるからです。

２．　全能の神―――受身的な反応(Reactive Response)

これは私たちが個人的なアイデンティティを作り出そうとする脳の働きです。この反応から、力や権力をもち、法律や規則をつかさどる新しい神が出現します。この神に助けを求めるのは、達成したり、成就したり、競争する必要があるからです。

３．　平和の神―――平穏な意識の反応（Restful Awareness Response）

これは平穏を望む脳の働きで、平穏をもたらす神に相当します。この神に助けを求めるのは、世界が自分たちを終わりのない混乱の渦の中に飲み込んだりしないと感じる必要があるからです。

４．　贖罪の神―――直感的反応(Intuitive Response)

私たちは自分自身を裏の裏まで知るために、自分の能力に頼っています。この反応に相当するのは理解と許しの神です。私たちの内側の世界がよいものであることを確認するために、この神を必要とします。

５．　創造の神―――創造的反応(Creative Response)

人間の脳は、新しい物事を発明したり新しい事実を発見したりすることができます。これはインスピレーションと呼ばれていますが、それを反映しているのが無から世界全体をつくった創造主です。私たちは自然が

もつ美しさと規則正しくかつ複雑であることに対する驚きから、この神を敬います。

６．　奇跡の神―――洞察力の反応 (Visionary Response)

脳は喜びと祝福を感じさせてくれる純粋な意識の形である「光」に直接アクセスすることができます。この反応に相応する神は、高尚な存在です。私たちは、平凡で日常的な現実の中にも、奇跡や魔法が存在し得るということを説明するために、このような神を必要とします。

７．　純粋な存在の神―――神聖な反応(Sacred Response)

脳は、脳の機能をもっていなかったひとつの受精卵（生命の小さなかけら）から生まれました。これに相応するのは、考えることなくただ在るだけの「純粋な存在」の神です。私たちがこの神を必要とするのは、源がなければ私たちの存在の基盤がまったくなくなってしまうからです。

チョプラのいう守り神はマズローの１～３段階、生理的欲求・安全の欲求・所属と愛の欲求に相応します。また、全能の神はマズローの４～５段階の承認の欲求・自己実現の欲求に相応し、平和の神以下は超越者に相当しますが、贖罪の神は４段階の承認の欲求、創造の神は５段階の自己実現の欲求にも関わります。マズローとチョプラの分析はよく似ているのですが観点が少しずつ違っているのと観察対象が違っていることから完全に同じに分けることはできません。

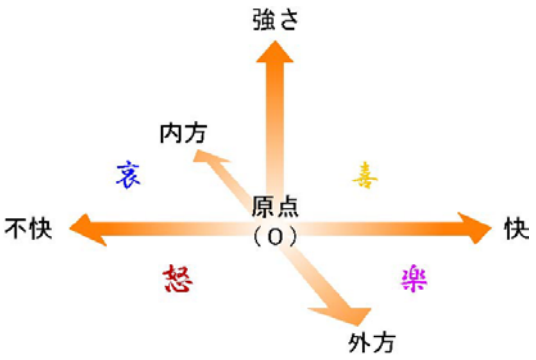
しかし彼等の分析は、人はその状況によって求める（欲求する）ものが変わる事を認めています。状況と言うのは外的環境と肉体・知性・情緒の状態と考えて良いでしょう。確かに、生まれて間もない乳幼児は自己実現など求めないし、平和の神など意識しません。

彼等とは全く観点を異にし、釈尊は「苦聖諦」として不快のもとを説いています。人は「快」を求めているのではなく、「苦」すなわち「不快」から逃れることを求めていると考えています。「生」「病」「老」「死」「愛別離苦」「怨憎会苦」「求不得苦」「五陰盛苦」の８つで八苦といいます。前４つは人生に於ける肉体的苦、「愛別離苦」と「怨憎会苦」は情緒的苦、「求不得苦」は望みが叶わない苦、「五陰盛苦」は心身の煩わしさということで、釈尊は段階的分析ではなく、不快を感じる要素について分析したようです。マズローや、チョプラが分析したのは「求不得苦」の内容であると言えます。

情緒の機能は「快」「不快」であるとしましたが、情緒的機能を表す言葉はこれだけではありません。喜怒哀楽、愛という言葉があります。情緒世界が

喜怒哀楽を有するので、幸福が表れるのはこの情緒の世界ということができるのです。

喜怒哀楽は簡単に「快」「不快」に分類できます。



喜と楽は「快」に分類されます。怒と哀は「不快」に分類されます。喜と哀は発揮される力が内向的、消極的です。怒と楽は発揮される力が外向的、積極的です。不快な力とは、不快を解消するために働く力です。

マズローやチョプラが分析した欲求や、脳の反応が充足されたときに、人は喜んだり楽しかったりします。これは基本分類です。喜び、悲しみなど、名前が付いている以上はこれ等も識蘊の内部で概念化されています。概念化されればそこには様々な予備情報が追加され、悲しみの中に美を結びつけたり、怒りに悪を結び付けるなど、個人差が生じているため単純な分類が当てはまらないことが多くあります。

図中で原点としてあるところは感覚の無い点です。何の刺激もないので力が働かない点です。不快な経験以上にこの無刺激は嫌われる傾向があります。不快経験はそこから脱するための力が生まれるので成長の可能性を持ちます。しかし、無感動、無刺激は何も生み出すことがありません。ホラーや絶叫アトラクションを経験したいと考えるのはそれゆえではないかと考えます。
快・不快の判別の付かない刺激は驚きと呼んで良いでしょう。

愛という言葉はさらに曖昧で抽象的なので、議論などには敬遠されるものです。愛は一般に人に好まれる要素が強いため、多くの文学作品などに取り上げられています。そのため多くの情報が概念に織り込まれ言語として単純な使用をすることができなくなっているのです。

多く用いられるのはそれだけひきつける力が強いことを表します。しかし愛という言葉は扱いにくい言葉です。基督教の宣教師が日本に聖書を紹介するときに「神の愛」「イエスの愛」という表現を使えず、「大恩」という表現をしたそうです。日本の伝統的な表現では、愛には「執着」「執着する意思」のニュアンスが含まれるためだと思います。「愛、あなたと二人。夢、あなたと二人。恋、あなたと二人。花、あなたと二人。二人のため世界はあるの…」古い歌ですが未だに通用する認識ではないかと思われます。しかしこれでは狭い

世界に執着し、広く世界に目を向けることが出来ない状況に陥りかねません。結果、周囲からの祝福を得られず自ら苦労したり周囲に苦労・心配をかけたり、あるいは死に向かうカップルまで現れることもあります。しかし今では、愛は「地球を救う」ものにまで昇格しています。愛は幸福の絶頂も、大きな悲劇も生み出す力を持ちます。

このような言葉ですが、情緒について語る上で重要なキーワードであり、一般に影響力の強い言葉であるので、論議のテーブルに載せるためには整理してゆく必要があります。

愛を単純に言い表そうとすれば「一致すること」と見ることが出来ます。欲求を充足す対象は、食べ物であろうと環境であろうと、私が求めているものと一致しているものです。一致しているので愛することができ、そこに「快」が生まれます。

勿論、人間同士で好みが一致するとか、目標が一致するとか、私が大切に思っているものを誉めてもらうだけでも嬉しくなれるのはこれが愛の始まりだからです。男女の愛では昭和歌謡ですが、あの素晴らしい愛をもう一度というのがいい例ではないでしょうか。「あの時同じ花を見て美しいと言った二人の心と心が…」

男女の愛もそうですが、友愛とか、家族愛などでも共通して言えると思います。親友などという間柄なら趣味、好み、目標など、なにかしら一致するものがある場合がほとんどです。生活を共にする家族であれば、それぞれの個性はあっても衣食住をつうじて根底で価値観が一致してきます。だから気持ちが許されるし、どこからかしら愛着が持たれます。

ところで、『一致』には二通りあります。一つは『相似形』の一致、もう一つは『相対形』の一致です。相似は似ていたり共通したりする多くの場合の一致、相対はジグソーパズルの隣り合ったピースの関係あるいは鍵と鍵穴の関係の一致です。

相似形の一致は、似た要素を持つもの同士がなじみやすい様子です。仲の良い友人同士思い浮かべて下さい。共通の年代であったり、共通の趣味であったり目的であったり、何かしら共通するものがありますし、共通するものが多いほど仲間意識は強くなります。詳細に分析していなくとも、なんとなく気が合うなどとも表現します。「合って」いるのです。傍目にも、グループとしての違和感がありません。一致して合流し、調和を作っているのです。「流」というのは方向が合っています。グループとしてのベクトルを持っていることが多

いのです。この状態は「友愛」とも呼ばれます。

相対形の一致はタイプの違う二人が長短を補い合って行動するような関係にあたります。ペアで競技をする場合など攻撃型と防御型で組むことで強力なチームになるようなイメージ。この一致は経験すると離れがたい関係になるようです。相対形の一致はなかなか簡単ではありません。タイプとしては正反対になりがちで、似ていませんから、お互いに近づこうとはしません。かといって共通の目的の下、補い合うためには調和することも必要です。噛みあうところが噛みあったとしても進もうとするベクトルがばらばらではどうにもなりません。合致の背後には相似が必要なのです。合致だけで突き進むと波乱万丈が訪れます。

親子兄弟は姿かたちから似ているところ相似形合流の愛を象徴するように思われます。男女の愛もその形から相対形合致の愛を象徴しているように思えます。

愛は人間同士の結びつきだけに作用するものではありません。衣食住の対象にも愛の関係が成立します。要望する内容に一致するものを愛します。これは相対形の合致と言えます。概念形成に際しても、自身の知識の中で欠けていると感じられる概念を探します。そこに一致するものは愛することが出来るので簡単に記憶することが出来ますが、一致しないものは愛せないので不快感となり、どれだけ正しいと言われても受け入れることが難しいのです。

一致したものはその繋がりを維持しようとします。これも一致する愛が快であることから、情緒的な力です。愛は調和を求め、調和は一致することにより生まれます。調和したものは安定し、不調和は不安定です。

愛していると言うのは、一致による調和を喜んでいる状態または、一致による調和を望んでいる状態。憎しみは一致することが疎ましく思える状態。つまりどこかが一致しているから憎いと思うのです。人間は複雑なので一致する部分がある相手にも完全一致ではなく部分一致でしかないという事があります。そうすると不一致部分すなわち不調和がどうにも不快に感じます。パズルのピースの似ているけれど違うものを無理矢理押し込んだような感じです。歪んだ愛で横恋慕して憎しみに変貌していくのは、不一致をきちんと認識しないでごり押しすると起こります。愛しているから憎さ百倍。ちなみに無関心は一致を見出していない状態です。

愛を一致であると定義したならば、人は知性的にも愛を追及する存在と言うことができます。知性の章で書きましたが、共通言語は共通体験に基づく共通認識によって得られます。共通認識とは、二者の認識が一致していることを表します。つまり、言語は一致によって生成します。表現を変えれば、言語は

愛の産物とも言えるのです。人が「真実・真理を知りたい」と思うのも、「正しくありたい」と願うのも、それが一致による調和をもたらすものだと信じているからです。逆から言えば、一致による調和をもたらすものを人は真実と呼び、真理と呼びます。真実・真理に準ずる行いが正義であると言うのです。しかし人類は総意としての一致を未だ見出しては居ません

3・成長する情緒と情緒の優位性（公共心と公共意識・情緒の優位性）

肉体は成長します。
肉体の成長は寸法を測ればわかります。
運動能力なども測定することが出来ます。
生命は天与のものであり、成長することは無くやがて燃え尽きるものです。

知性は肉体の成長を土台に成長してゆきます。
観念世界の成長も知能検査や様々な試験で測定されます。

情緒は成長しますか？
情緒の成長については、なにか測定方法があるという話を私はまだ聞いたことがありません。

情緒も成長します。
喜びを感じる対象の変化がそれを表します。情緒の喜びは最初は本能的欲求の充足という極めて個人的内容に始まります。（チョプラの戦うか逃げるかの反応）しかし、この本能的な欲求を満たす行動を通じて観念世界の拡大が始まると、今度は観念世界の拡大そのものの刺激が大きくなり目的化してゆきます。（チョプラの受身的な反応）

観念世界の拡大とそれを満たす行動はなにをもたらすでしょうか？これは観念世界の内容（各個人の経験値）によって大きく左右されます。人間の肉体の構造はおおよそ共通するものなので本能的欲望は大きな差異はありません。しかし、生きる環境はそれぞれに異なるので、作り上げられる観念世界には差異が生じます。この差異によって次に求めるものが違ってくるのです。

本能的欲求が満たされることだけを喜ぶ幼い時代から、知的欲求を求め時代がやってきます。またその後にも違った喜びを求める展開がありますが、測定方法が確定していないことが物語るように、何をもって成長と言うかは確定的なものがありません。

「知性」と「情緒」とどちらが先行すべきかと問うと現代人の多くは「知性」が先行すべきだと答えるでしょう。「情緒」の社会的地位はとても低く設定されています。これは「情緒」の中心を「本能的欲望」と捉える向きがあるからです。本能的欲望は情緒の成長の如何に関わらず誰にでも見られるものなので、これこそが人間の情緒の中心であると考えるのです。本能的欲望にも情緒は関わりますが、これは最も幼い状態の情緒を見ているわけで、赤ん坊を見

て人類を評価しているようなものです。体力に於いても、知性に於いても、人は成長してその才能を発揮します。情緒に於いてもその成長段階がきちんと認識されるべきなのです。

情緒の主たる機能は『価値決定』です。そのものを好むか好まないかは情緒が決定しますが、様々な好みの個人差はそれまでの個人的な経験に基づいており、なかなか理論的に説明の付くものではありません。では情緒の中心だと思われている「本能的欲望」は何処から来ているでしょうか？

生命は天与のものであると考えます。そして、生命と肉体との関係の中から生まれるのが本能的欲望です。即ち「生きたい」「食べたい」「眠りたい」「繁殖したい」です。これらの欲望が満たされるときに、情緒は快いと感じ、結果として肉体は成長します。肉体の感覚器官から受け取ったイメージから心に要望があがってきます。それにどう対処するかの決定を知性が行います。何を判断基準とするか、情緒がその刺激をどれだけ強く好むか（価値観）、対処によってどのような結果をもたらすのかを総合的に判断するのです。このときに、情緒が幼ければ目の前の刺激のみを求めて強く欲求します（自己中心）。しかし、その対処がもたらす結果が更に大切に思えることに害をもたらすと予想されれば、情緒はその被害を回避することを求めるのです。知性にできるのは結果に対するシミュレーションです。

そして本能的欲望は必ずしも悪ではなく肉体を維持してゆくために無くてはならないものです。自身の存在を支える欲求を情緒は否定しません。肉体の必要を埋めることは情緒が快とするところです。結果として本能的欲望は情緒なくしては生まれませんが、それを実行したときに他者を傷つけることを感じ、他者を傷つけることの不快感が強ければ実行したいとは思いません。情緒内部でも本能的欲望を抑制する力が働きます。つまり、情緒の中心は好むこと、と考えていいでしょう。行うにせよ引き留まるにせよ、そのようにしたいそうでありたいと積極的な願いなのです。この時に、好むものが自分自身から身近な他者、身近な存在からより広い世界へと広がることを「公共心」の広がりと言えます。

これを知性が判断するとしたら、「禁止されているから止めなければならない」「社会的に定められているからやらねばならない」という具合に「ねばならない」という消極的選択になります。これは「公共心」に対して「公共意識」と呼んでよいでしょう。情緒に対してブレーキをかけようとする力になり、ストレスとなります。どちらが好ましい姿かと問われれば情緒の成長によって生じる公共心の積極的選択が望ましい姿でしょう。そうすることによって快のエネルギーは活発に働きます。情緒が知性に劣るというイメージは知性に

よる決め付けに過ぎません。

知性は概念の中にかつて情緒が下した価値判断を保存してあります。その古い価値判断と、他者が下した判断のコピーで情緒抜きの行動判断を下すことができます。その方が早いし、周りの人ともうまくやっていけるような気がします。情緒の方もそのほうが楽だと思ってしまえば、いちいち価値判断をしません。かくして情緒は活動を停止して成長することをやめてしまいます。公共心は成長せず、情緒は知性的公共意識に従うのみの存在になってしまいます。これはそのまま宗教に対する科学の優位性に反映しています。

１の６ページの図のように、科学は情緒を除いた人間の全てを網羅しようとしています。体の性相である生命についてはまだまだ解明し切れてはいませんが、そのメカニズムについては解明しつつあるのだと豪語します。一方宗教は様々な奇跡的な現象（生命や機能・能力面）をもって科学一辺倒な世の中を批判しようとしますが、論理性に乏しいために知性を納得させることができません。

知性がもっとも必要とするのは整合性です。情緒は理性が求める整合性を超越し、快に向かうパワーを暴走させているように見えるので、知性には情緒が理解しきれないし厄介な存在と感じられます。知性の立場からは、情緒は観念世界の整合性を破壊する厄介者となっているのです。知性はこの整合性をもって自らの観念世界を構築しています。この観念世界を構成する素材が大量の概念であり、概念の要素が言葉とイメージです。つまり言葉が『心の中の体』の骨格を成しているようなものです。

コギト・エルゴ・スム～我思う故に我あり～デカルトの有名な言葉です。“思う”と表現されていますが、この“思う”は思考することを指します。デカルトの話では、主観即ち思考と思いがちですが、心と表現した場合には、何より喜怒哀楽の感情を思い浮かべるものです。情緒こそが心の中の心であり、知性は心の中の体であるとするならば、心の中で心と体が葛藤しているということになります。

“情緒”の中心は“愛”であり、その主たる力は『価値決定』なのだと書きました。平たく言うと好き嫌いの問題です。子供の好き嫌いと大人の好き嫌いには明らかに違いがあります。

幼い一致は一方的になる可能性がありますが『調和』は双方向的でなければ成立しません。そして幼い情緒には双方向の一致を感じ取る感性が十分ではありません。

他者の情緒を理解するのは知性による理解でしょうか、情緒による理解で

しょうか。

　他者の状況と反応が何を示すのかを視聴覚の情報から知性的に分析し、自己の情緒の価値観に照らして判断するという流れになりますから、知性と情緒の共同作業にほかなりません。結果、知性とともにではありますが、幼い経験の乏しい情緒には複雑な他者の情緒との一致は難しいと言えます。逆に言えば、多くの他者の情緒と共鳴できる情緒はそれだけ成長した情緒であると言えます。

　成長した情緒であれば知性からの情報を多角的に良く味わい、その情報に対し優れた価値判断をすることが出来ますが、本能欲求のみを喜ぶ情緒であれば知性からの情報を蔑ろにこそし、リードすることが出来ません。

マズローの２段階目の安全の欲求で知性と共同一致した情緒の欲求が表れています。３段階目の所属と愛の欲求が、段階的ではありますが純粋な情緒的成長の姿です。４段階目の承認の欲求の低次は知性的、高次は情緒的欲求です。マズローの分析の中でも、情緒の成長が３段階に分類されていることが見られます。

肉体の成長は、環境から栄養を取り込んで成されます。知性の成長は環境からの情報を、肉体を経て取り込んで成されます。

情緒の成長は、肉体（色蘊）と、知性（識蘊）から想蘊に送られてくる情報を取り込んで成されると言えるでしょう。

情緒が求めるものが一致であるとすれば、より多くのものと一致できることはより大きな快となるはずです。公共意識の拡大は必ずしも会を伴うものではありませんが、公共心の拡大は確実に快をもたらすことでしょう。

ただ、自己は自己を認識できませんので、高次元の喜びの世界はそこに足を踏み入れて初めて知るものとなります。

一致するためには単独ではできません。実存は単体で存在することに幸福を見出すことができないという結論に至ります。ここに、実存の哲学を超えて、共同体の哲学の必要性があります。

第二部の共同体の哲学では、情緒の成長について更に詳細に検証することになります。